

Journal of Chubu University Education

No. 20
2020

【実践研究・実践報告】

オンデマンド型遠隔授業の活性化

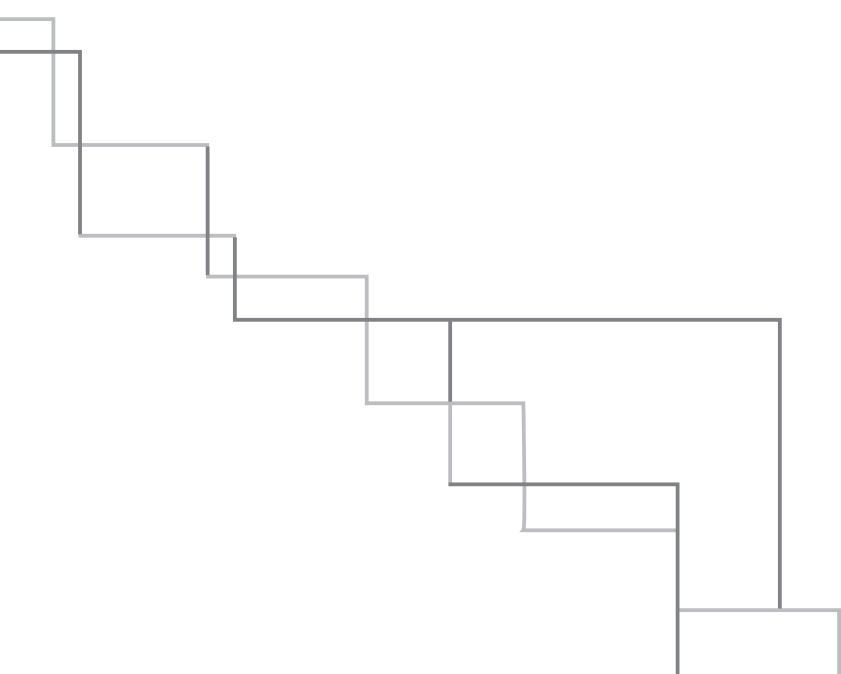
－「異文化コミュニケーション論」の授業を例として－ 塩澤 正

【Practical Reports】

Activating an Online Course On Demand:

An Example of a Cross-Cultural Communication Course

..... SHIOZAWA Tadashi



オンデマンド型遠隔授業の活性化

ー「異文化コミュニケーション論」の授業を例としてー

塩澤 正^{*1}

要 旨

本小論は、新型コロナウイルスの感染拡大により余儀なくされたオンデマンド型遠隔授業「異文化コミュニケーション論A」を、可能な限り帰納的（inductive）かつ、学生参加型（participatory）で運営するために筆者が2020年度春学期に思案した工夫、留意点、課題などの記録である。学生からの授業コメントを引用しながらその効果や課題を考察する。手探り状態で授業準備を進めたが、遠隔授業であろうとも「面接授業に相当する」教育効果のある授業にするために、いくつかの点に特に留意した。具体的には「スライドは学生にまとめさせる」「音声を添える」「教え過ぎない」「身近な事例を用いる」「課題は応用問題のみにする」「体験型要素を取り入れる」「学生自身に教えさせる」「素早い個人的フィードバックを心がける」「感情を揺さぶる教材を使用する」「加算方式の評価をする」などである。「有意味学習論」や「内発的動機付け」とその関連領域の学習理論を応用し、授業スライドと課題の提示に様々な工夫をした。結果的には予想外に学習者から肯定的に受け入れられた。

キーワード

オンデマンド、遠隔授業、異文化コミュニケーション、アクティブ・ラーニング、有意味学習論

1 はじめに

2020年初頭からの急激な新型コロナウイルスCOVID-19の感染拡大により、当年春学期には多くの教員が十分な経験や知見を持たないまま、遠隔授業での授業開講を余儀なくされた。筆者もその一人である。暗中模索の中、手探り状態で授業準備を進めたが、1つだけ特に留意した点がある。それは、単なる情報提供型の授業にしない、ということである。ただし、当該の授業は英語英米文化学科の1年生全員が履修する大人数（70名超）の講義科目であるため、同時双方向型（Zoomなどを利用）の授業運営は難しいと判断した。そこでオンデマンド型の授業で、しかも、筆者の限られたIT技術の範囲内で、可能な限り学生主体で学生が自ら考え、参加するような形式の授業になるよう心掛けた。スライド作成に様々な工夫をし、学生に寄り添うような形で授業を運営した。結果的には受講者からは予想以上に肯定的に受け入れられた。本小論は、2020年度春学期実施の本学英語英米文化学科の1年生向けの授業である「異文化コミュニケーション論A」を学生参加型で運営するために、授業期間中に考えた様々な工夫、留意点、今後の課題などの記録である。筆者が独自で行った学生からの授業コメントを引

用しながらその効果や課題を検証する。

2 基本は「面接授業に相当する」教育効果

授業実践とその留意点に入る前に、遠隔授業に関する基本や留意点について確認しておきたい。

2020年春からの新型コロナウイルスの急激な広がりを受け、日本の教育機関は急遽、緊急避難的に「緊急時遠隔教育」（ERT: Emergency Remote Teaching）（原島・ジェンキンス 2020）を行った。どちらかという場合当たりにビデオ会議システムや学習管理システム（LMS: Learning Management System）を利用した感は否めない。本来ならオーストラリアやアメリカの多くの大学が、その分校に通う受講生やキャンパスに通学できない学生のために実施している「遠距離教育」（Distance Education）のような、学習目標とコースデザインをしっかりと考えたうえで、学習効果を考慮しつつ行われるべきものであろう。あるいは、世界の大学間の授業をICTで結び、共修学習をプロジェクト型協働学習方式で行う“COIL”（Collaborative Online International Learning）のように、国際的な共修学習を行うことが教室内の対面学習より、より高い教育効果が期待できるときに利用するのが遠隔学

^{*1} 人文学部 英語英米文化学科 教授

習であろう。

日本でも文部科学省2001年の告示第51号により、大学で遠隔授業により単位を与えることが可能となったが、その最も大きな運営条件は、「面接授業に相当する教育効果を有する」授業の提供である（文部科学省2001）。その他、具体的な要素として授業終了後すみやかに設問解答、添削指導、質疑応答などによる十分な指導を行う双方向的な（意見交換の機会が確保される）授業の運営が期待されている。

今回のような「緊急時遠隔教育」であろうとも、上記のように学習効果に配慮して厳しい条件の下で授業を行うことは、受講生の立場にたてば当然であろう。文字のみの資料を提供し、課題を提出させるが、フィードバックをなかなか返さないような授業運営は許されない。考えれば、他人が書いた要点しか書いてないようなスライドを誰も読みたいと思わない上、読んでも内容が理解できるとは思えない。音声で補足し、視覚的な補助やエピソードが添えられ、十分に考える時間とそれを共有できる仲間がいて、初めて学習がスムーズに成立する。単なる講義や読み物やビデオの提示などは、頻繁に学習定着率や昨今のアクティブ・ラーニングなどで引用されるLearning Pyramid（理論的なもので実証されているものではないことに留意（Lalley, J. & Miller, R. 2007））を引くまでもなく、高い教育効果を得ることは難しいと思われる。たとえ、対面授業と全く同じ授業をビデオクリップで提供しても、その場の空気感や質問の機会などが確保できない場合は、一方的な情報提供であり、よほど工夫がない限り、高い教育効果を上げることは期待できないであろう。

ここで紹介する「異文化コミュニケーション論」という授業では、異文化間コミュニケーションに関する基礎「知識」を増やし、「文化相対主義」（文化には上下優劣はないとする考え方）にもとづく、寛容的・非差別的な「態度」を身につけ、積極的に異文化を持つ人間と「行動」することができるための基礎能力を身につけることが目標である。もともと対面授業であっても、「知識」だけではなく、学習者に「態度」や「行動」の変容を期待する授業であり、一方的な情報提供でその目標は達成できない。だが、問題はオンデマンド型の授業で、本学のLMS（CoursePower）上で主にパワーポイントによるスライド教材を提供するだけでそれが可能になるか、という点である。しかも、可能な限り学生が主体的に参加し、考え、情意面や行動面を刺激するような授業を展開することができるのだろうか。

難しいと考えたが20年も前にすでに素晴らしい類似の実践があり、ヒントを得ることができた。同志社大

学経済学部の実践事例である。同大学では2001年から、教室での面接授業を一切行わずインターネット配信でのみ授業を提供し、正課授業科目として単位を認定する「オンデマンド型インターネット授業」を開始し、大きな成果をあげている。宮崎（2003）によれば、授業評価では、遠隔授業の方が「かなり理解しやすい」「やや理解しやすい」「双方とも違いはない」を合わせると91.3%にもなったという。教員の講話、板書、教材をデジタル化して配信し、加えて質疑応答や設問回答、添削指導、受講生と教員および受講生同士の意見交換が、電子メールや電子掲示板により行われた。受講者の授業への関わりや教員とのやり取りが密であり、授業の満足度が上がったことが想像できる。ただ、システムの枠組みは分かったが、具体的にどのような点に留意して、どのような教材を作成し、どのようなフィードバックを返したかなど、授業の方法や留意点までは不明であった。だが、91.3%もの受講者がこの授業スタイルを肯定的に受け入れたことはその枠組み以外に、教員の並々ならぬ工夫や努力があったに違いないことは容易に察することができる。同じ枠組みを使ったとしても、異なる教員が運営すれば、同じだけの評価を得られたかは疑問である。重要なのは、その担当者がどのような資料をどのように提供し、教育効果をあげるために、どのような点に留意したかである。ここがわかれば、類似の遠隔授業にも応用し一般化できる。本小論に意義があるとすれば、その留意点や工夫の中身を、20年後の現在における学習管理システム（LMS）と新しい教育上の知見を利用しながら、学習効果の観点から紹介することである。

以下、この授業の概要と授業を活性化させるための考え方や工夫について考察していきたい。

3 授業の概要と活性化の基本

まず、簡単に「異文化コミュニケーション論A」の1学期間の授業内容（簡易シラバス）と1時間の授業の流れを述べておきたい。

この授業は本学の英語英米文化学科の1年生全員が、春学期に履修する「指定科目」である。再履修者や他学科からの履修者を入れると70～80名の履修者がいる。春学期は、以下のようなトピックを扱った。

- 1) なぜ異文化コミュニケーションを学ぶか
- 2) 文化とコミュニケーションの関係
- 3) 言語コミュニケーションの特徴
- 4) 非言語コミュニケーションの特徴
- 5) カルチャーストレス・カルチャーショック
- 6) ステレオタイプ
- 7) 異文化適応
- 8) 価値観と価値前提

- 9) 偏見
- 10) 差別
- 11) 内なる国際化
- 12) 異文化コミュニケーション能力とは
- 13) 異文化理解教育
- 14) 復習と課題提示
- 15) まとめ

1つのトピックについて、1回の授業で完結する。通常の対面授業であれば、上記の授業に加えて学期に2回ほどの大きな課題と定期試験がある。今回は講義を短縮版とし、定期試験、「内なる国際化」は割愛し、本来なら別々に扱う「偏見」と「差別」を一回の授業で扱った。授業後に毎回、課題としてエッセイの提出を課した。

授業形態は上記のようにオンデマンド型の遠隔授業である。本学のLMSであるCoursePowerを用いて、パワーポイントで作成した20枚前後のスライドを授業予定日の4日前までに提示した。同時に履修者のLINEグループ上にその旨を知らせた¹⁾。各スライドには2～3分で筆者が音声で解説を添付し、学生は筆者の補足説明を聴きながらスライドをめくり、自分のペースで学習を進める。そのまま聞き流せば30～40分で全て見終わるが、各スライドにはウェブページへのリンクや小さな課題などがあり、実際にはスライドを読み終わるには、ほとんどの学生が90分以上を要していたようだ。実際、課題のエッセイの執筆まで入れるとこの授業に関して2～4時間ほど勉強する。今学期は本学では正式な授業評価を行わなかったが、非常勤先でよく似た授業に関して学習実態の調査をしたので、これを参考にすると、そこでの1回分の受講に対しての学生の学習時間は1～2時間が28%、2～3時間が48%、3時間以上が20%、1時間未満が4%であった。2時間以上学習していたものを合計すると68%である。筆者の予想より多くの時間をかけて授業に取り組んだようだ。

その後、学習者はそのトピックに関連した700文字前後のエッセイを、2日後までに提出することになっている。この課題の提出によって出席確認としていた。4回以上未提出（80%未満）により単位を落としたものが4人いたが、残りの学生は皆、期限内に全ての課題を提出した。LMS上に投稿された課題は筆者が1人1人目を通し、400文字前後のコメントを加えて可能な限り2日以内にフィードバックを返した。以上が授業の一連の流れである。

さて、授業活性化の工夫であるが、その基本は学習者が何らかの形で授業に主体的に関わるにはどうするかという点であり、これを意識しながらスライドを作

成し、課題を考えた。講義や資料提供だけではなく、Learning Pyramidでいう「視聴覚の多様」「実践（実例）を観る」「他人とディスカッションをする」「自ら体験する」「他の人に教える」という学修定着率が高いと言われている学習活動の要素を、オンデマンド型のスライド中心の学習形態に取り入れることとした。具体例は後述する。

この授業を組み立てる上で学習理論の基盤としたのは、「有意味学習論」と「内発的動機づけ」とその関連領域の理論である。「有意味学習論」（Ausubel 1968）とは学習者本人にとって学ぶ意味のあること、あるいは本人の生活と何らかの形で関係することを題材として学ぶことが、学習定着率の向上に繋がるという考え方である。英語学習を例に取れば“‘What’s the weather like?’”とか“‘What day is it today?’”などと、頻繁に小学校や中学校の英語の授業の始まりに教員が学習者に聞くことがあるが、これは学習者にとっては全く学ぶ意義がない質問であると考えられる。学習者は窓の外をみれば天気はわかる。当日が何曜日であるかなどということは、誰でも知っていることである。学ぶ本人にとって話したり学んだりする意義があることの方が学習効率は良いという考え方である。

「内発的動機づけ」（intrinsic motivation）とは、将来の就職のため、あるいは試験でよい成績を取りたいなどの理由で学ぶのではなく、本人にとって楽しいから、あるいはその学習自体に意味があるから学んでいるという心理状態をいう。これに対して、「外発的動機づけ」（extrinsic motivation）は、動機の源が自分ではなく、外からの原因や刺激に起因する動機付けをいう。Deci & Ryan (1985) は、人間には自律性（autonomy）の欲求、有能性（competence）の欲求、関係性（relatedness）の欲求という3つの本質的な欲求があったとした。自律性とは自分の行動は自分で選択し責任を持ちたいという欲求であり、有能性の欲求とは、自信や自己効力感を持ちたいという欲求であり、関係性の欲求とは周囲の人や社会と繋がってほしいという欲求である。これらの3つの欲求が満たされたときに、人は内発的に強く動機づけられて行動するという考え方である。言語学習であれば、自ら選んだ言語や教材で、学習段階の上昇を実感しながら、目標言語を用いて文字や口頭で意思疎通ができる喜びを知るという一連の言語学習活動が、動機づけをさらに刺激するというものである。この考え方を異文化コミュニケーションの遠隔授業にも応用した。

このような基本的な考え方のもと様々な工夫をしてみた。それらの工夫がどのように学習者らに受け入れられたかを、彼らのコメントを交えて以下具体的に紹介する。

4 活性化の工夫とその評価

主な授業の活性化の具体的な工夫は以下の10項目に集約される。

- 1) 授業スライドは学習者が作る
- 2) 音声を添える
- 3) 身近な事例で「有意味学習」
- 4) 優れた外部リソースを活用
- 5) 教え過ぎない(自分でまとめ、考える)
- 6) 課題は全て応用問題
- 7) 体験する、他の人に教える
- 8) 素早いフィードバック
- 9) 加算方式の評価
- 10) 感情を揺さぶる教材の使用

以下、スライドの例も示しながら具体的に説明したい。

4.1 授業スライドは学習者が作る

「自己決定理論」(Deci & Ryan 1985)に従えば、学修の自律性は非常に重要な学修の継続性に関わる要素である。そこで授業用のスライドは筆者ではなく、学習者自身に作ってもらうこととした。学習者らをいくつかのグループにわけ、そのグループ内で相談して、春学期の担当トピックを選ばせた。そして、そのトピックについて、担当グループに責任を持って授業用のスライドを作成してもらうこととした。一年生であり、協働作業は慣れていないことは想像できたが、筆者が修正すればいいだけの話である。提出されたスライドの質よりも、彼らが授業の教材づくりに関わることで自体が動機付けに繋がると考えた。予想通り、提出されたスライド教材は、ほぼ全面的に書き直す必要があったが、以下のようなコメントから、この方法は意義があったと考えられる。

- ・クラスメイトとの共同作業により、協調性の向上にも繋がった。
- ・毎回の授業で使用するパワーポイントも、自分たちで作成したものなので、達成感があった。
- ・自分が作成したスライドが授業で出てきたときはちょっと興奮した。
- ・他の人が上手にまとめていたので驚いた。

4.2 音声を添える

スライドに筆者の音声を添えたのは非常に好評であった。スライドで要点だけを説明もなしに提示されても、情報の厚みや幅が無いと、理解に至らないことが多い。一見無駄に思える授業中の小さなコメントや関連したエピソードなどが理解を助けてくれるのである。実際、学生からの授業評価に関するコメントでもっと

も多かったのは、この音声添付についてである。以下のスライドのように、筆者の解説音声ファイルを画面の上に貼り付けた。学習者はこのスピーカのアイコンをクリックすることにより、このスライドに関する解説を聞くことができる仕組みになっている。

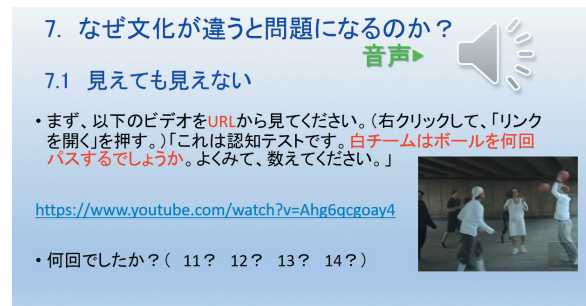


図1 音声を加えたスライド

学生からのコメントには、以下のようなものも多く、この音声対面授業に近い臨場感を生み出していたようだ。

- ・音声が付いていたので「対面授業」のようで分かりやすかった。
- ・音声がある方が聞きそびれる心配もなくしっかり学べました。音声を添付した形であれば、直接授業に近いものだったと感じます。事例や体験談があり理解しやすかった。
- ・音声入りのパワーポイントで教えていただけることで自分のペースで進められるためメモを取りたい時は一時停止して、もう一度聞きたい時は巻き戻すなどができていました。
- ・実際に先生が実体験なども交えながら説明してくださっている音声のおかげで、文章だけではわかりにくいものなどもわかりやすかった。

4.3 身近な事例で「有意味学習」

添付する音声ファイルでの解説では、教科書の内容やスライドで提示している概要を繰り返さないように心がけた。スライドの内容をそのまま説明するのは情報の繰り返しであり、予習した学習者にとっては冗長な情報でしかない。音声で提供する情報は可能な限り要点と関連するエピソードや学習者に身近な例を取りあげ、彼らにとって「有意味学習」が成立するよう心がけた。例えばステレオタイプや偏見に関する授業では、それらが何であるかという定義より、具体的に学習者たちが抱くだろうステレオタイプや偏見などについて、音声で問いかけた上で、それについて事例を豊富に使って解説することとした。

また、その事例やエピソードやスライドに登場する画像も、可能な限り学習者らと関係ある人や既知の物

事であることを心がけた。以下のスライド（図2）は、非言語コミュニケーションに関するものだが、左の写真は英語英米文化学科の教員と先輩たちがピースサインをしている。その右の写真の中でのハグシーンは1年生らがこれから留学する可能性の高いオハイオ大学での歓迎会からのものである。服装も非言語コミュニケーションではメッセージを持つ重要な媒体だが、これも本学の入学式後の教員と学生の服装とオハイオ大学での歓迎会の服装を事例として示している。このように自分と関連する現実の世界を例に挙げ、学習者自身にとって関連があり、見ること、学ぶことに意味があることを心がけた。



図2 有意義学習の例

学習者からの以下のようなコメントからも、このような身近な例や画像が学習を助けたことがうかがえる。

- ・写真にいま流行りのものが多く使われていて、わかりやすく、授業を受けていてとても楽しかったです。この先もしもオンラインの授業が続いても安心して授業を受けることができました。
- ・どれも自分が体験することだらけだと思います。私は来年の長期留学に参加したいと考えているので、そのためにはこの授業のことをしっかりと覚えておきたいと思います。
- ・先輩方の体験記が面白かったり今までいろんなものに対して持っていた偏見自体に対しても考え方が変わったりしました。
- ・例文やわかりやすいたえがあり、先生が解説を付けてくださったことで、対面授業により近い授業を受けることができ、深く学べたことがたくさんありました。
- ・初のオンライン授業ということで大変だったと思いますが、毎回丁寧なスライドを作っていただき、音声も入れていただき、ありがとうございました。毎回ノートをとってしまうほど、楽しい授業でした。

4.4 優れた外部リソースを活用

授業用スライドは全て自前の教材を準備するのが理想だが、今回のような緊急事態には、そのような時間

的余裕はなかった。加えて、教員1人のアイディアや能力でできることは限られている。しかし、ネット上にある優れた動画や画像はこのような問題を瞬時に解決してくれる。これらの外部の優れた教材にリンクを張ることによって、授業がよく練り上げられたテレビドキュメンタリーと同じような効果をうみ出してくれることもある。じっさい、これらのビデオ教材を観て感動し、考え方や生き方が変わりましたなどと発言するような学習者も現れた。

以下のスライド（図3）はステレオタイプについてのものであるが、筆者が解説するより上手に様々な動画を使って説明してあるYouTubeのビデオクリップへのリンクを張り、さらなる理解を促した。

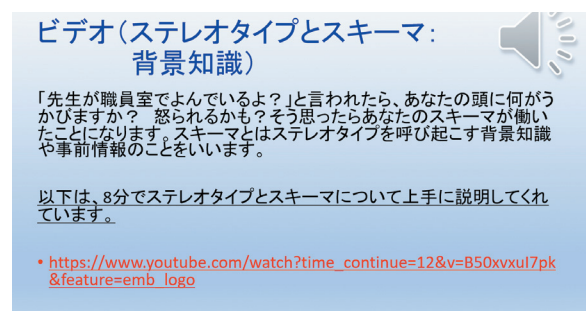


図3 外部リソースの利用

以下は、学習者からの外部リソースに関するコメントである。動画のみならず、筆者がクラウド(Dropbox)に格納しておいた写真や文書もリンクを張ることによって更なる発展学習が容易になり、非常に有効であった。

- ・参考資料のビデオも授業理解にとても役立った。
- ・特に好きだった授業は張素の動画を見て感想を書いた授業です。私は中国に対してあまり印象が良くなかなかわりを持つことに抵抗がありました。そんな偏見を持っていたのだが、あの授業で180度考え方は変わりました。
- ・加えて、参考資料参考動画が多くあり、私が普段触れないものに触れることができ、面白かったですし、知識が深まったと思いました。この講義は私にとって世界が広がるきっかけになった面白い講義でした。
- ・PowerPointを見て、ビデオを見て、レポートを書くとなると90分じゃ全く足りなかったです。でも、時間を忘れてレポートを書けるくらいこの授業は面白かったです。私はいろんな科目のなかでこの授業が1番好きで楽しいと感じます。
- ・張素ちゃんの動画を見て色々なことを学びました。行動力や観察力や努力など自分より年下の子がやっていて余計心にしみました。自分の今まで足りない部分が再確認出来たのでとてもよかったです。張素

ちゃんが日々日本語を覚えようとし、クラスメイトの人たちが一生懸命教えようとしていた所に感動しました。

- ・オンライン授業じゃなかったら張素ちゃんの動画にも出会わなかったかもしれません。この素晴らしい動画に出会わせてくれた先生に感謝します。
- ・パワーポイントで丁寧に説明してくださったり、動画をたくさん用意してくださったりしてとてもわかりやすい授業だったと思います。
- ・今回の遠隔授業は長いようで短かった。与えられた課題には苦労したが、いろいろと自分でも異文化の事を考えることが出来た。この中で良かったところは、映像を使っただけの授業だ。もし普通の授業だったら板書するのに必死だ。
- ・カルチャーショックを学んだ時、とても衝撃が大きかった。先輩たちの感想を見て、日本で感じている不安は海外へ行くと倍以上の不安になることを知った。私は人見知りなためこの話を見たとき、とても不安になった。それと同時にとても考えさせられた。

4.5 教え過ぎない（自分でまとめ、考える）

筆者の教員としての座右の銘に“Tell me and I will listen; Teach (Show) me and I will remember; Involve me and I will learn.” - Benjamin Franklin.がある。これは、アメリカ先住民や孟子の教えとも言われているが定かではない。だが、アクティブ・ラーニングの重要性を世界中で、昔の人がすでに気が付いていたことは間違いない。

アクティブ・ラーニングというのは英語では、Participatory Teaching という。Communicative Language Teaching (コミュニケーションを取りながら、意味を伝えることを中心に置き言語を学ぶ方法) が主な教育方法となっているELF/ESL/EIL (国際共通語としての英語教授法) 教育の分野では、ごく自然な発想であり、授業は常時学生参加型でなければならないと考える。学生を積極的に授業に関わらせる技術 (student involvement) は授業評価の基準としても最も基本的なことである。よってアクティブ・ラーニングの考え方は「当たり前」過ぎて、この重要性をわざわざ主張する人はいない。

しかし、これは他の全ての教科においても本来は同じではないだろうか。情報をスプーンで口から与える (spoon feeding) ような授業では、学習者は頭を働かせないし、学習効果は低くなりがちだ。受講者の立場からしても情報を与えられるだけの授業が興味をそそるとは思えない。もちろん、単純な講義でも刺激的でウィットに富み、学習者の頭がフル回転し、知的で

感動的でさえあるものもある。例えば、あのTED TALKS®のビデオで世界で最も視聴されている講演者であるSir Ken Robinsonの講義などはそのいい例である。氏はスライドさえも使わない。だが、そのような神業的な講義は普通の教員には難しい。学生に様々な問いかけをし、その反応をまとめ、さらに課題や作業を共有しながら効果的な授業を成立させることが一般的だろう。教え過ぎないで、学生と一緒に考える。ここに学生の能動的な学習への参加を期待するのである。受験勉強ではないのだから、答えやルールを直ぐに提供し、「もっと勉強したい人は自分で頑張ってください」という教え方は、学校教育にはそぐわない。

18. 誰にでもあるステレオタイプ

・この続きを書こう。

- 1) 名古屋人は_____だ。
- 2) 女は・男は_____だから困る。
- 3) 太っている人は_____だと思う。
- 4) ドイツ人は_____だ。
- 5) 中国って_____だと思う。
- 6) アフリカ系アメリカ人は_____。



図4 自分でまとめ考える

このような考え方のもと、LMS上の提示スライドでは、可能な限り筆者が全ての情報をまとめて提供することはしないようにした。学習者が自らネットで調べて、スライドにある表を完成させる、あるいは、まずは筆者が質問を用意し、一度学習者に考えさせてから、次のスライドで情報提供するという形式にした。例えば、図4はステレオタイプについての導入用のスライドだが、まずは自分の中にあるステレオタイプについて気づかせることを目的としている。これを文字で説明してしまうと学習の「気づき」が起こらない。しかし、こうやって帰納的 (inductive teaching) に考えさせることによって、自らその背景にあるルールや考え方に気づき、記憶により強く刻まれることとなることが期待できる。

このスタイルの学習方法は学生は不慣れであるため、戸惑うのではないかと考えたが、以下のコメントにもあるように、深く考えるきっかけになったようだ。

- ・やはり授業の中で「気づかされる」ことが僕的には一番面白いのかなと思いました。
- ・異文化コミュニケーション論の授業は毎週自分自身を考えさせられてとても深い授業でした。特に自分に足りていないものがよく分かったと思います。
- ・偏見と差別の授業でも考えさせられることが多くあり、これも、関西人はうるさい、すぐどついてくるなどといった偏見から始まり、それを種にして差別

が始まってしまふ。偏見は見た目で相手に言う事も行動を起こすこともないですが、差別は実際行動に移している。これがなかなか変わらないのが現状なので、過去にも学んだとおり、相手の文化を受け入れて、自分にあてはめてみる。そういったことを取り入れていきたいと考えさせられた春学期の授業でした。

- ・「ステレオタイプ」について考えさせられました。ステレオタイプは私たちの脳内に常に存在していて、その情報や記憶を元にあるものをこういうものだと当てはめていることを知りました。
- ・張素から学ぶ異文化コミュニケーション能力では、文化相対主義が大切だと改めて考えさせられた。

4.6 課題は全て応用問題

授業が理解できたかどうかを確かめるには、その概要をまとめさせるとするのが一般的だ。だが、それはあくまで、与えられた情報をどれだけ記憶に留めたかという点の確認にしかすぎない。本来、課題とはそれに取り組むことにより、さらなる深い理解を促すものでなければならない。特に、異文化コミュニケーション論という学問の性質上、受講者の「態度」や「行動」の変化を促すような課題を提供したいと考えた。深く考えさせ、情意レベルに訴えるような課題である。そのためには、学んだことを自分の生活に照らし合わせて、どのような態度や行動をとるべきかを考えるような課題が必要である。そこで、基本的に課題は全て応用問題とすることとした。例えば、授業で学んだことを何も知らない仮想中学生に理解できるように説明する、授業で学んだ問題が自分（日本人）の生活のなかでどのように表れているか、どのように対応できるのかを考える、ビデオ教材について学んだことと絡めて感想を書くなどの課題である。このような課題に取り組むことにより、「感動した」「考え方が変わった」「～しようと思った」などという「態度」や「行動」の変化を促すような学習体験ができると考えた。

図5は価値観や志向（例えば、日本人は調和志向、集団志向、謙遜志向などの傾向がある）についての課題だが、これを十分理解したかどうかを確かめるために、調和志向、集団志向、謙遜志向とは何か？という問いかけはしていない。ここでは、自分の今までの生活体験（嫌われるのが嫌で発言しなかった、高校までトイレにまで友達を誘って行った、「つまらないものですが」と言いながら手土産を渡したなど）や映画やことわざに表れる日本人の志向について事例や体験談を記述し、解説することを要求している。図5の例ではやや難しいことも考慮し、例をいくつか示してある。

課題 8 志向について

- ・前半で、スライド25の問題3～10に志向を入れなさい。解答は、3（弛緩志向）、4（～志向）、5（～志向）などと書きなさい。
- ・後半で、具体的に日本人的な志向がよく表れている有名な出来事、映画やドラマの1シーン、日本人がよくする行動、発言などを2つ以上取り上げ解説し、なぜ、それが、日本的な志向なのか説明しなさい。課題全部で700字くらいで書いてください。
- ・例：映画なかで「寅さん」はいつも「それを言っちゃ～おしめえよ」という。これは、それを言ってしまう、誰かが傷つくから、言わないことがいいんだという意味があり、日本の「調和志向」がよく表れているといえよう。他にも、ジムに運動に行くと、初心者はずっとこのほうで、運動をしている。ベンチプレスなどすることはなく、簡単に小さな器具を使っている。新参者ということだろうか。なんとおとなし気に気を使っている。これは日本人の「謙遜志向」や「調和志向」の表れではないだろうか。3つ目の例として、年賀状だ。別に何を頼むこともないのに、毎年「今年もよろしくお願いします」と書く。あなたに私は頼っていますよ。あなたがいないと私は困るのです、という意味の表現だ。これこそ日本人の「依存志向」や「謙遜志向」の表れではないだろうか。他にも高校は「形式志向」の塊だった。スカート丈、髪の色、朝の会など、形式をとにかく整えようとして先生方は必至であった。……

図5 自分の体験の中から答える

以下の学生からのコメントを読む限り、課題に取り組むことにより、認知レベルを超えて情意レベルでの刺激が強く、態度や行動の変化があったことがうかがえる。

- ・自分の未熟さを感じられる授業だった。異文化コミュニケーションという教科を受講し、物事の見え方が変わったと感じる。
- ・将来の夢もなく、外国に強い興味もなかった私は、こんな気持ちでここにいることを情けなく思っていた。あの先輩方の経験談を読んでから、留学に強い憧れを抱き、世界を知りたいと思うようになった。そうすると、ほかの授業も楽しくなり、ここ最近では充実している。
- ・カルチャーショックの先輩方の経験を読み、深く感動し、感銘を受けた。
- ・私が最も印象深かった授業は、「小さな留学生」です。本当に良い影響を受けました。あんなに小さくわからないことが多い年齢にも関わらず自分を信じて学ぶ意欲はとても感動しました。異国の地で不安なことがあり泣きながらも一生懸命人と関わる姿は本当に尊敬しました。とても勇気がいらします。そんな彼女の姿を見て来年留学する時、私も積極的にコミュニケーションを取り、「自分から学ぶ」を大切に過ごしていきます。
- ・張素の日本に来てからの、今まで全く触れても来なかった文化と小学生ながら必死に馴染もうと努力している姿にとっても感動しました。日本に来る前とその一年後に張素が中国へと帰ったときの彼女の成長した姿を比較すると「人はこんなにも変わるものなのか」と感動したのを覚えています。私も彼女の考え方を見習い、一人の人間としてもっと成長できるよう頑張りたいと考えています。張素ちゃんを見習って過ごしていきます。

4.7 体験する、他の人に教える

「討論」「体験を通じた学習」「他人に教える経験」などはアクティブ・ラーニングで用いる基本学習形態

である。しかし、これをスライド中心のオンデマンド教材で実現することは難しい。だが、遠隔授業で学んだことを身近な人間（親しい友人や家族）に話したり、やって見せたり、教えることで、このような主体的・参加型の学習スタイルが経験できる。だが、授業以外で、学習者自らがこのような行動をとるとは考えづらいので、課題とするしかない。外発的な動機付けによる学習行動の誘発であるが、これが肯定的な経験となれば、内発的なものにも変化することも期待できる。これをきっかけに、家族や友人と遠隔授業で学んだことを共有し、議論することも可能となると考えた。

課題 for Day 3

文化とコミュニケーションの関係「受動能力」の大切さ

・「経験こそが異文化である」ことに関するビデオがあります。ビデオの中でやっていた指を組む動作（左親指が上か右親指が上か）さえ1人1人みな違うことを、家族で確かめてみてください。家族に異文化とは何か伝えてみてください。その結果を今日の授業と絡めて、2分以内の音声ファイルとしてラインで塩澤まで個人的に送ってください。

<https://www.dropbox.com/sh/aprm03lff1t1m32/AACSINLmcN6OolNpLAaclWra?dl=0>



図6 自分の体験の中から答える

図6は、国や民族での違いばかりではなく、全ての人間の間で起こるコミュニケーションは異文化間コミュニケーションである、という考え方を理解するための簡単な実験である。指を組み左親指が上か、右親指が上か、それはなぜか、などと家族間で考えてもらう課題であり、それを上手に説明しているビデオがある。学習者らにはこのビデオを視聴してもらった後、家族を相手に同じような実験をして、それを確認し、課題として報告してもらった。さらに、家族間の対話の臨場感を提出課題に持ち込むために、文字ではなく、音声ファイルとして筆者にLINEを使って送ってもらうこととした。このような課題を課すことにより、「討論」、「体験を通した学習」、「他人に教える」状況などが必然的に生まれることを狙っている。

図7は、「異文化コミュニケーション教育」を扱う授業で使用したスライドである。体験的、発見的な学習方法がどの程度有効なのか、家族を相手にやってみよう、と促すスライドである。これは課題ではなかったが、授業の一環として、学習スライドの中に入れた。異文化コミュニケーション訓練で最も大切なことは、異文化の違いの背景や原因を自ら発見し、（疑似）体験的に理解することである。

以下の実験の1つ目は、対人距離の実験である。自分の顔を家族の1人に近づけ、相手がのけ反ったところが、対人距離の限界であることを理解するというものである。2つ目は「お城」を家族に描かせ、それが

西洋のお城か、日本のお城か確認するというものである。同じ「城」の話をしても、互いの経験（文化）が異なると別のイメージを持っているかもしれない。これがコミュニケーションがスムーズに進まない原因になるかもしれないということ、体験的に気づいてもらうことが狙いである。3つ目は、異文化適応能力である「自己修正」の難しさを行動や感情のレベルで体感してもらうための実験である。普段と異なる行動をしてもらい、違和感やその難しさを実感するという課題である。オンデマンドのスライド中心の授業のみではこのような学習形式は不可能だが、家族となら体験的に学ぶことができる。家族との笑いや違和感の伴った学びの機会は絶好の参加型の授業になりうる。このような課題を課すことによって、学習者が深く関わるParticipatory Teaching（アクティブ・ラーニング）が可能となる。

35. 異文化コミュニケーション訓練体験

1. まず**あなたが実験**しよう

1) お母さんか兄弟に普通にしゃべりながら、30センチくらいまで近づいてみよう。きつとのけぞるはず。文化の泡を意識する

2) お母さんか兄弟に「お城」を描かせよう。名古屋城になるか、シンデレラ城になるか？違っていたらコミュニケーションは大変

3) いつもの反対をやってみよう。それが異文化です。（着ない服を着る、電車で異性の隣にわざと座る、嫌いなものを食べる、普段は聴かない音楽を聴く、お父さんの靴を履いてみる、ゲップを食事中にする）




図7 家族で実験してみよう

これらの課題に対する学生からのコメントは少なかったが、肯定的なものが2つあったので紹介しておく。

- ・おかあさんに指を組んでもらったら、親指の位置が私と違っていて驚きました。ビデオでも言っていましたけど、家族の中でも異文化ってあるのだとわかりました。
- ・先日、コンビニで並んでいたら、前の人が床の線に視線をやって、私をにらんできました。ソーシャルディスタンスを促していたのでしょうか。対人距離ってあるんだと実感しました。

4.8 素早いフィードバック

4月に手元に届いた本学からの遠隔授業に関する文書には毎回課題を課すように指示されていた。これは同時に毎回それに対してフィードバックが必要であることを意味する。実際、筆者は延べ200名前後の学生に対して、春学期中に毎週300通ほどのフィードバックを返した²⁾。自分で決めたことだが、正直これには閉口した。真面目にフィードバックを返すとなると、他の仕事に手が回らない。しかし、学生、とくに不運な1年生のことを考えると、他の教員同様、一人一人

の課題に対して、個人的に評価とコメントをつけてフィードバックを返すしか選択肢はなかった。再度、同じ状況になるとすれば、同じことはしないだろうが、あの状況では、何とかやるしかないと考えた。教員ならごく自然なことで、多くの教員が同じような想いでこの状況に対峙していたのではないだろうか。

この「異文化コミュニケーション論A」でも、毎週LMS上にあげられる約70件の700文字前後のエッセイに対して、可能な限り、2日以内に評価とコメントを返却した。図8は、提出された700文字のエッセイに対しての筆者のフィードバックの一例である。だいたい400文字前後で返答した。コメントの最後に10点満点(X/10)で評価を示した。図8の学生は非常に素晴らしいエッセイを書いたので、10点満点中13点の評価点を獲得した。この方式については、次の節で説明する。

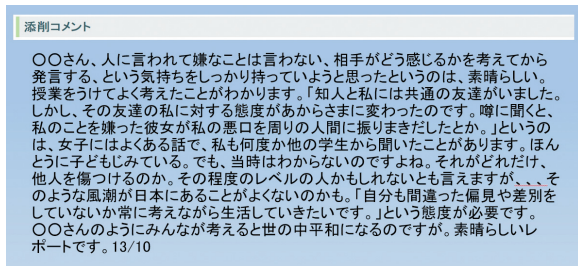


図8 課題へのコメントサンプル

このフィードバックは学生からの授業コメントを読む限り、非常に肯定的に受け止めてくれたようだ。筆者もこのコメントを繰り返している間に、対面授業より学生一人一人をより身近に感じたこともあった。提出されたエッセイを読みながら、一緒にその学生の顔写真をコンピュータ画面上で開くことが親近感を助長したのかもしれない。

この素早い一人一人に向けたフィードバックに関しては多くの学生がコメントした。以下に、いくつか紹介する。

- すべての課題に評価だけでなく一言コメントが添えてあったので、そのコメントを読むことで次の授業も頑張ろうと思った。
- 忙しい中、先生からの評価とコメントをしてくれるのがとてもうれしかったです。
- 課題の評価やコメントを毎週してくださった事が、モチベーションの向上に繋がりました。
- 不安ながら出したレポートも先生は毎回コメントをつけてくれたり、良い点数をくれたりと、私は嬉しい気持ちになりました。それが私の自信にもなりました。最初は苦手意識を持っていた文章も慣れてくると楽しくなりました。

- 時には先生に迷惑をかけてしまったこともあって、それは申し訳なく思っている。自分の課題が良くない時には丁寧にコメントをしてくれたことには感謝をしている。

4.9 加算方式の評価

従来の試験では一般的に目標点(満点)である100点に対して、そこからどれだけ遠かったか、あるいはどれだけ不正確であったかということで「減点」することにより評価を与える。できないことに対するペナルティーが100点からの減点である。しかし、本来試験とは、教員と学習者ともに、どこかの理解が難しかったのかなどを確認するための「診断テスト」(diagnostic test)であるべきであり、また、試験を受けることが学習の動機付けの一助となるものであろう。特に、今回のような緊急事態下の授業毎の小課題は、評価というより、次の授業への動機付けとしての役割は大きい。よって、できたことに対して点数を積み上げ、基本的に学生への鼓舞を目的とする「加算方式の評価」を採用することとした。筆者の課題に対して、期待以上のエッセイが返却されれば、満点である10点を超えて11点、12点をとることも可能とした。

これはもともと、英語教育における「国際英語論」の考え方を応用したものである。国際英語論では意味が通じるかどうかが問題であり、発音や文法が多少不正確であったとしても、コミュニケーション上、十分な「国際汎用性」があれば減点すべきではないとする。特に非母語話者が母語話者のように完璧な英語を話し、書くことはほぼ不可能であり、それを求めること自体が意味のないことであるという考え方に基づく。目標はあくまで「自分が設定する可能な限り高いレベルの汎用性のある英語を操ることである」とすれば、いつまでもたっても母語話者のような発音や完璧な文法で英語を操れない自分を責めることも、途中であきらめることもない(塩澤 2016)。現実的で非母語話者学習者に寄り添う、新しい考え方である。「異文化コミュニケーション論A」の授業でもこのような発想に基づき、できないことを減点するのではなく、可能な限りできること、理解したことに対して加点することとした。その結果として、満点である10点を超える評価を得る者もいた。この方が、学習者の動機付けを刺激し、次に繋がる評価となったことは明らかである。彼らからは以下のようなコメントがあった。

- 次も頑張ろうという意識の向上につながったと思います。
- 加算された分の嬉しさが確実にあった。たとえ満点を取っても、あの一点が欲しかったら次はどう回答しよう、というように、どこが間違いでどう“いけ

なかったか”ではない向上心を擲ってくれたと思う。

- ・加算方式の評価は、自分自身のモチベーションが上がったので、次も加算してもらえようと思えようと思えてよかったです。
- ・書いた内容を満点よりも多い点数をつけてもらえると、とても嬉しかったので毎週評価を見るのが楽しみでした！
- ・満点を頂いても十分嬉しかったのに、さらに追加点を頂くと、次回へのモチベーションが上がった。学生の意欲的な授業の取り組みに加算方式は有効だと思う。

4.10 感情を揺さぶる教材の使用

定着率が高い学習方法は、アクティブ・ラーニングとしての討論や体験学習を伴ったものだろうが、同様に感動したり、驚いたり、恥ずかしい想いをして覚えたものも記憶に残ることが多い。単語なども努力をした記憶はないが、無意識のうちに記憶しているものは、一定の状況の中で、感動や恥ずかしい想いを伴って学んだものであることが多い。そこで、認知レベルではなく、この感情のレベルで学習者に訴える教材作りを心がけた。異文化コミュニケーションのように、学習者に「態度」や「行動」の変容を期待する授業では、感情を揺さぶるような教材づくりが不可欠である。

具体的には、「あ～、なるほど」とうなずける発見学習、海外で大変な想いをした本学先輩の実話、TEDなど深く考えさせられるプレゼン、ステレオタイプや偏見に関するドキュメンタリーなどを多用した。これを課題で、自らの体験などと絡み合わせて考えてもらうことで、より深い感情のレベルの学びがおこることを期待したのである。

学習者からのコメントは上記の4.5や4.6と重なる部分が多いのでここでは省略するが、「考えさせられる深い授業でした」「本当によい影響をうけました」「物事の考え方が変わりました」「深く感動し、感銘を受けた」「人はこんなにも変わるのかと感動した」「自分から学ぶ」を大切に過ごしていきます」「一人の人間としてもっと成長できるように頑張りたい」などという文言が見受けられ、態度や行動の変化があったことを示唆している。これは従来の知識伝達型の授業では不可能なことである。

5 課題と解決に向けて

手探りで始めた授業形態であったが受講者からは想像を超える好評価を得て、苦勞が報われた想いである。ただし、課題も多い。最も大きな課題は、オンデマンド型の授業であるため、素早い質疑応答が難しかったことだ。学生からのコメントでも、自分の課題が的を

射ているかどうか不安で、課題執筆中に教員に質問をしたかったというものがあつた。1年生全員がLINEで筆者（と多くの英語英米文化学科の教員）や学生同士ともつながっていたため、その気になれば質問も可能であつたろうが、教員に個人的に質問するのは気後れしたのかもしれない。もちろんLMS上でも教員に質問はできたはずだが、電子メールと同じで、タイムラップが足かせとなった可能性が考えられる。オンデマンド型の授業に加えて、必要に応じて適切な時間に希望者だけでも同時進行型の短い補足的授業を設けることにより、これは解決したのかもしれない。だが、実際にそれだけの手間を掛けるかどうかは、またコストベネフィットを考えなければならない。

また、学生からのコメントで他に改善点として挙げられたのは、学生同士の意見交換の場が十分に確保されていなかったことだ。これもLINEグループを利用すれば可能であろうが、70名以上の仲間が一斉に読むとなると学生たちは躊躇しがちである。ZoomやGoogle Classroomなどで小部屋を用意すれば少人数での議論が可能だが、このような形態の授業を受けた学生からの報告では、学生同士だと発言が少なく、気まずい時間が流れるだけだったという指摘もあるから難しい。

さらに、授業の活性化という意味で改善点を挙げれば、さらに学生中心、学生参加型のスライド作りや学習活動を含める努力をすべきだったというものがある。上記のようにいくつか授業活性化の工夫はしたが、全てのスライドが学習者自身で調べて、周囲の他の人と議論し、さらに自ら情報収集したり、調査するような形式であったわけではない。その半数近いページはまだまだ情報提供型のスライドであった。1学期間の授業を終えた今、さらなる授業の活性化に向けてさらに工夫し、改善することは可能かと思われる。

以下は受講者からの改善に対するコメントの主なものである。

- ・他の人が授業に関する内容でどんな経験をしたことがあるのかを聞いてみたかったなと思いました。
- ・また一緒に勉強する友（ライバル的存在）がいないので一人で努力する才能のある人しか勉強が進まないと思います。
- ・友達と意見の交流ができないことだと思います。意見の交流をすることで自分とは違った角度で物事を見られて新しいことに気づききっかけになるかもしれない。でも、Zoomでグループを作られても直接話したことがないので気まずいかもしれない。
- ・自分一人で授業を受けるため自分に甘えが出てしまうこともあったり、話す友達もいないため「何しているのだろう？」と感じ、寂しくなったりすること

も何回かあった。

- ・緊張感の欠如によるやる気の低下、課題の提出を忘れることです。私自身いつでもやれるという思いから提出し忘れた課題があります。
- ・授業でわからないことがあっても先生にすぐに聞けない事だ。他の先生の中にはメールしても返信がこない先生もいて大変戸惑った。
- ・声付きのスライドで授業を聞いて、レポートを提出するという流れですが、結局、終始無言の状態なので、意見交換の練習として、クラスワークの機会を設けることができたらしかったです。

6 まとめ：態度や行動の変化を促せたか

冒頭で触れたように、この授業は、異文化コミュニケーションに関する基本的な知識を獲得するばかりではなく、「文化相対主義」に基づき、考え、行動できる学生を育てることが授業の目標である。顔を見ることが不可能なオンデマンド型の授業で、情意や行動のレベルでの変化を期待できるのか当初は不安であった。実際、不可能に近いと考えていた。本来は、対面授業で多くの「帰納的発見型学習」や「疑似体験型学習」を通して、やっと何とか一定のレベルで理解できるようになる。だが、色々工夫しながら1学期間、この授業を運営してみて、それはある程度可能であることが実感できた。遠隔授業であるため、学習者らは必ず自ら能動的に学習し、十数回の課題を提出しなければならなかったという意味では、対面授業より、遠隔授業形態の方が、真面目に学習に取り組んだのではないだろうか。また、対面ではないため、対人的な不安がなく、落ち着いて学習できたという学生もいるかもしれない。

以下の学生からの評価コメントからは、かなり深く考え、情意的にも刺激的な授業内容もあったことが推察できる。また、これからの彼らの行動面でもそれなりの影響があることが予想できる。以下のコメントは、この授業で「自分が変わったかもしれない」と書いた学生たちのコメントである。やや多いが、授業の活性化の工夫の効果と本講義の目的が達成できたかどうかを判断するよい資料となるので、ここに挙げさせていただきたい。1) 行動や考え方の変化、2) 授業への興味の高揚、3) 偏見や差別意識への気づき、4) 感情のレベルでの学びの4つのグループに整理した。

1) 行動や考え方の変化

- ・最近では、ふと見かけた疑問などについて、今まででは考えようとしていなかったことに対して考えようとしている自分がいてとても驚きました。
- ・この授業を受けてから考え方の幅が増えた気がしま

す。人の考え方に寛容になりました。

- ・この授業を通じて、私は少しでも異文化に寄り添えるような人間になりたいと思った。
- ・異文化の授業はこれからの私の生活に大きく響くと思う。外国人をいい意味で見ると目は変わるし、尊重を必ずすると思う。それほど異文化に触れられてよかったと思える授業内容だったと思う。
- ・私はこの授業を通して知ることができたけれど、周りには自分の価値観で勝手に、外国人に対してよくない印象を持っている人がいると思います。その子たちにも、この授業で習ったことを、教えてあげたいなと思いました。
- ・このステレオタイプの授業を受けてからは、イメージだけで物事を判断するということが少なくなった。それは、この授業で、実際に体験してみることが大切であり、人から聞いた情報だけで物事を決めつけてしまうのは偏見や差別につながることもあり危険であることを知ったからである。
- ・地元のミスコンに出てみた。出会った全ての人と関わり、実際に授業で学んだ「接触仮説」として、他の参加者にコミュニケーションをとって見たが、以前鬱病にかかっていた人、自分の魅力を引き出したいと考えている人、自信がないからこそ変わりたいと思っている人、など様々な考え方や文化に触れることができた。その体験から、自分自身の生き方におけるステレオタイプや偏見に気づいた。皆一人ひとりが全力で努力し、自分と向き合っていた。

2) 授業への興味の高揚

- ・異文化コミュニケーションはほんとに好きな科目になったので、遠隔でもここまで受けられてよかった。楽しかったです。
- ・結果的にこの「異文化コミュニケーション」の授業を最後まで受けて本当に面白くて良かったです。
- ・授業は少し笑いがでて疲れが飛んだ感じがして楽しかったです。
- ・もっと異文化について理解を深めていきたい。
- ・カルチャーショックという言葉や差別や偏見について分かっていると思っていたけれど、講義を受けてはじめてそれがどういうことなのかを知り、もっと学びたいと思わせてくれた講義でした。

3) 偏見や差別意識への気づき

- ・自分の中にある差別意識に気づき、細心の注意を払う必要があると思いました。
- ・自分でも本当に驚かされました。「差別するとかほんとサイテー」とか言っていた自分が恥ずかしいです。この様に自分の気づいていないところで差別し

てしまっているのかもしれないととても考えさせられ、これからの自身の行動が変わると感じました。

- ・私はこのエピソードにハッとさせられた。実際アフリカ系の人たちに電車で会ったことはないが、想像してみたら無意識にも避けてしまうかもしれないと思った。これは私の中にある、紛れもない差別の気持ちだと気づいた。私は自分の中にある偏見や差別の気持ちに今気づけたことも、本当によかったと感じている。
- ・これまで、自分は差別や偏見をしない、していないと思っていました。でも、この講義を受けて少なくとも偏見は持つことがあったとわかりました。外国人を珍しそうな目で見てしまうことって結構あるけど、じっさいに自分がその立場だったら、ものすごく居心地が悪いと思うし、嫌だと思えます。相手の立場に立って考えてみる、ということも学びました。
- ・差別というものは日本ではあまり関係のないことだと思っていた。いざ考えてみるとコロナでの差別や在日外国人への差別なども見えてきた。学んだことから関心を持って自分で調べ、今現実で起きている事に目を向けることは大切だと学んだ。私ひとりの問題に向き合う力は小さいが、関心を持つ人が増えることで何らかの効果があることを期待している。
- ・異なる背景の人と実際に接してみることで、自分がどれだけ狭い経験でそのイメージに当てはめていたのかを知り、違いは発見なのだから自分のステレオタイプに基づいて価値判断をしないことが重要だと理解しました。

4) 感情のレベルでの学び

- ・知識が増えた状態で見た張素ちゃんのビデオにはとても感動させられました。張素ちゃんはとても幼いときに異国の地に行き、言葉も通じない小学校にも通っていました。そして、必死にコミュニケーションをとろうとする姿とその行動力には、感無量でした。
- ・あんなに小さい子が異国の地でたくさん考えて、考えて強く生きて行く姿にはとても感動させられました。彼女の行動力や忍耐力は自分が留学した時に参考にしたいと思うものがたくさんあって、彼女の強さを見習いたいと思いました。
- ・私も中学生時代に同じクラスの留学生がいましたが、そんなにも苦労しているとは思いませんでした。もっと助けてあげられたのにと後悔しました。

ただ、遠隔授業は対面学習に匹敵するほどの効果をあげることができるとは思えない。その場の空気感、学び合う仲間の温かさ、笑い、意見交換、加えて疑似

体験学習などは、異文化コミュニケーションの授業では欠かせない。紙面やバーチャル空間でのコミュニケーションもコミュニケーションには変わらないが、その媒体の一部でしかない。コミュニケーションとは基本的には対面であり、異文化間でのコミュニケーション問題が起こる場面も、対面であることが多い。これを実感しながら学ぶには対面授業が最適である。しかし、今回のこの遠隔授業の経験は、その可能性と利点と課題を浮き彫りにしてくれたことは間違いない。今後、さらに洗練されれば、対面学習と混合させ日常的な授業にも取り組むことも可能かと思われる。大変な思いをさせられたコロナ禍の遠隔授業であったが、学ぶことも多く、将来的には「いい経験であった」と言えることを願って止まない。

注

- 1) 英語英米文化学科では数年前から、連絡用に最初の学科オリエンテーションで当該学年のLINEグループを作成し、頻繁に学科の連絡用に使用している。この参加者と当該の授業の履修者がほぼ一致するため、このグループが全体的な授業のフィードバックや情報提供の徹底に役立っている。
- 2) 2つの特定の授業では、エッセイと英語での音声ファイルの課題があったため、200人程度の学習者に対して、300件のフィードバックを返す必要があった。

参考文献

- Ausubel, D. (1968). *Educational Psychology: A Cognitive View*. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- Deci, E. & Ryan, R. (1985). *Intrinsic Motivation and Self-Determination in Human Behavior*. New York & London: Plenum Press.
- Lalley, J., & Miller, R. (2007). The learning pyramid: Does it point teachers in the right direction. *Education*, 128(1), 64-79.
- 塩澤正 (2016) 「今、なぜ国際英語論の視点が必要か」 塩澤正・吉川寛・倉橋洋子・小宮富子・下内充 (編) 『『国際英語論』で変わる日本の英語教育』くろしお出版.
- 原島秀人・ジェンキンズ・アダム (2020) 「世界標準のオンラインプラットフォーム Moodleを英語授業に活用する」『英語教育別冊』69 (8), 82-83.
- 宮崎耕 (2003) 「オンデマンド型インターネット授業の概要と課題」(http://www.juce.jp/LINK/journal/0302/03_02.html) 2020年9月18日閲覧
- 文部科学省 (2001) 大学設置基準第二十五条第二項の

規定に基づき、大学が履修させることができる授業等について定める件 (https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/07091103/002.htm) 2020年9月18日閲覧

文部科学省(2020) 学事日程等の扱い及び遠隔授業の活用に関わるQ&Aの送付について(4月21日時点) (https://www.nii.ac.jp/news/upload/20200424-2_Nishiyama.pdf) 2020年9月18日閲覧

Activating an Online Course On Demand: An Example of a Cross-Cultural Communication Course

SHIOZAWA Tadashi*¹

* 1 Professor, Department of English Language and Culture, College of Humanities, Chubu University

Abstract

The world-wide spread of the new coronavirus infection, COVID-19, forced us to conduct most courses online. Among the courses the author taught online was an introductory freshman course, “Cross-Cultural Communication A.” This course requires the participants to think, feel, and act in a way different from how they usually do in their home culture. But how can they achieve this goal by simply reading slides on a Learning Management System? By drawing on Meaningful Learning Theory and Self-Determination Theory as well as some related learning theories, the author had the learners make slides themselves, demonstrate and teach what they had learned to their family members, write essays on their cross-cultural experiences after every lesson, and report on video clips that stimulate their emotional behavior among others. He also tried not to teach too much to encourage their autonomy, and adapted a unique evaluation system of which the purpose was to add points for what they had learned, and refrained from penalizing for what they had not learned. In this way, most students tried very hard to receive extra points. As a result the course was very well received. This paper depicts some attempts to make this on-demand distance learning course as participatory and student-centered as possible. Some drawbacks and points to improve are described as well.

Key words

on-demand, online course, cross-cultural communication, participatory teaching, meaningful teaching theory